

地域の底力

宮津市・京丹後市・伊根町・与謝野町

地域を支える人々の 思いが広くつながる 「海の京都」丹後地方

京都府北部の市町が一体となり、
観光事業に取り組む「海の京都」。
その一翼を担う丹後地方では、
観光、伝統産業、飲食、交通と、
それぞれを担う人の努力が花開き、
未来に向けて実を結ぼうとしている。

丹後半島の北東部に位置する伊根町の夜景。手前に広がる伊根湾は一年を通して波静かな状態のことが多く、水面が灯りを映す幻想的な景色が望める。並ぶ家屋は、舟屋と呼ばれるこの地域独特の伝統的な造りになっている。

取材・文 山内史子 写真 野瀬勝一

時代の変遷に合わせた 観光への取り組みをめざす

京都府北部の福知山市、舞鶴市、綾部市、宮津市、京丹後市、伊根町、与謝野町が一体となって展開する通称「海の京都」。今回はその中から丹後地方の四市町を訪れ、観光を基軸とした現状と未来への展望を探ってみた。

最初にお話を伺ったのは、宮津市でエネルギーを中心とする地域商社を展開する三洋商事代表取締役社長・今井一雄氏だ。今井氏は京都経済同友会北部委員会委員長、

宮津商工会議所会頭として、地域の活性化にも深く関わっている。

「『海の京都』以前は、京都に海があるというイメージは全く持たれていませんでした。また、天橋立の名を知っていても、日本のご位置するののかほとんどの方がご存じなかったんです。『海の京都』を通じて、宮津に天橋立があることや、丹後が古代からの神話や歴史の宝庫でもあることを知ってもらいたいですね」

神話につながる代表格が、かつて豊受大神が祀られ、天照大神から呼び寄せられて伊勢神宮に遷ったとされる「元伊勢・丹後一宮 籠



三洋商事代表取締役社長の今井一雄氏と、本能寺の変の後、逆臣・明智光秀の娘として一時期丹後国にかくまわれた細川ガラシャの像。左奥、1896年創立の宮津教会は、国内にある現役の聖堂としては最も歴史ある建物。

神社」だ。その奥宮は、伊弉諾尊が天界からはしごを降ろした場所だという。また、聖徳太子の母である穴穂部間人皇女が「一時期丹後に身を寄せていたなど、歴史的な逸話も多数残る。今井氏は過去を振り返りながらこう語った。

「旅の形態が団体から個人に変化し、さらに海外からの旅行者が増加するなか、見て終わりの昔ながらの観光地は、飽きられるしリピーターも生まれません。時代の変化に対応した形で『ここにあるものを自分たちで磨き直して観光に活かそう』という意識が当地でも生まれています」

すでに外国人旅行者が好む造り

や長期滞在に対応した宿泊施設も現れてきた。さらに、「海の京都」に合わせるかのように二〇一六年、京都からの高速道路が丹後地方の奥の方まで延びたこともあり、外国人旅行者が着実に増えているという。その中には、今や移動が便利で宿泊費もリーズナブルな丹後を拠点として、京都市内や大阪、神戸へと出かける旅行者もいるという。

丹後地域のインバウンド需要の伸びしろは大きいと今井氏は話す。

「京都市内への外国人旅行者は増えていますが、その数からみたら丹後地域まで足を延ばす人は、まだまだ少ない。神社仏閣に飽き



豊受大神が祀られていた宮津市の「籠神社」。豊受大神は、食物や穀物を司る神。酒造りにも長けており、美味美酒に恵まれた丹後を象徴しているかのよう。



左／「KUSKA」代表取締役の楠泰彦氏は、「大がかりな開発がなされていない分、丹後は昔ながらの営みが残る」と魅力を語る。下／子どもを持つ若い世代の女性が働きやすいよう、工房の作業時間はフレキシブルに調整できる。

足らずに丹後半島のような自然環境を希望する方は増えるでしょう。そうした旅行者をこちらに誘導するため、京都市内各所との連携を密にしていけるかが今後の大きな課題ですね」

宮津市も日本の他の地域同様に、少子高齢化が進む。とはいえ、若い世代が新規の飲食店や宿泊施設をつくったり、イベントを立ち上げたりという動きもあるという。観光業の活性化や交通の便の向上は、若者の流出対策にもつながると今井氏は期待する。

「丹後から京都まで車でわずか一時間半です。都会はたまに行けばいい、生活はこちらのほうがお

もしろい、というイメージもできつつあります。将来きつと、都会ではなくこちらに住んでも良いという人が増える時代が来ます」

伝統産業に吹いた 温故知新の新たな風

丹後の新たな産業の柱が観光ならば、一帯におけるかつての丹後の主要産業だったのが、丹後ちりめんだ。最盛期の一九七三年には年間一〇〇〇万反も生産され、機をガチャンと織るほどに万札が稼げることを意味する「ガチャマン」という言葉もあった。

しかしながら着物文化の衰退や安値輸入品との競合もあり、現在の生産量は年間三〇万反ほどまで

減っている。そうしたなかで売り上げを伸ばしているのが、ネクタイをはじめとする「KUSKA」のちりめんの技術を活かした手織りの商品だ。

代表を務める楠泰彦氏の実家は、宮津市に隣接する与謝野町で一九三六年から織物業を営んでいるという。楠氏は、当初は家業を継ぐ予定はなく、東京で建設関係の企業に就職。その後、二〇〇七年に帰郷した。

「ピーク時から四〇年以上ずっと右肩下がりの産業なのに、同じことをしていてもしょうがない。オリジナルを模索するうちに、手織りに行き着きました。昔の技法に戻すのではなく、時代の進化や技術そして経験を踏まえた上で、改革して新しいものをつくるという発想です」

そこで機械織機を全て撤去して、手織り機を導入。当初は、職人とたった二人からのスタートだった。手織り反物が売れないなか、その打開策として自社ブランド「KUSKA」を二〇一〇年に設立。翌年以降、東京の原宿や銀座に本店を置く二つの有名百貨店



ちりめん産業でにぎわった与謝野町加悦地区に残る、江戸時代末期建築の生糸ちりめん商家「旧尾藤家住宅」。「ちりめん街道」と呼ばれる旧街道沿いに建つ。

やセレクトショップから注文が入ったことが、上昇への転機に。二〇一五年には京都の烏丸三条に自社ショールーム兼店舗を設け、さらには欧州の世界最高峰のメンズ服飾展示会にも出展して、高い評価を得た。その商品のロゴマークには、「TANGGO」の文字が記されている。

「『KYOTO』のほうがブランドインゲ的にわかりやすいでしょう。しかし、自分たちのアイデンティティーをロゴに入れたかったんです。私が生まれた場所、丹後には織物をつくってきた三〇〇年の歴史がある。だからこそクオリティーの高いものができるという思いを込めました」

「飯尾醸造」五代目当主の飯尾彰浩氏は、無農薬の米づくりからはじまる本業はもちろん、2017年開業のイタリアンレストランではスタッフとして自らもてなし役を務める。



現在、楠氏を含めて社員は若い男性と主婦層を中心に一三人。さまざまなメディアで紹介されたことで認知度が高まり、地元出身の若い世代から、商品や就職に関する問い合わせも入るそうだ。

「衰退する様子を見てきた僕らの世代にとって、丹後ちりめんの業界は古くさい印象がありますので、それを払拭したいという思いがあります。丹後でつくったものが世界で勝負できることを、地元の人たちにもっと知ってもらいたい」

東京や海外への出店も目指しているそうだが、楠氏はこうも付けて

加えた。

「でも、最後にはこの与謝野町に店を構えたい。現在四〇歳の私が六〇歳ぐらいになる頃にここに戻ってきて、工房兼ショールームという形で世界各地から『TAN GO』にお客さんが訪れるようにしたいと考えています」

まちを思う心が 背中を押した新規事業

家業を継ぎつつ、新たな試みに挑んでいるのは、宮津市にある飯尾醸造五代目当主・飯尾彰浩氏もまた同じだ。一八九三年創業の飯尾醸造は、無農薬の新米を原料とし、昔ながらの製法で時間をかけて日本酒から仕込む「富士酢」で知られる。そのふくよかな味わいは、全国の一流料理店の職人から支持されている。

「三代目、祖父の輝之助が、一九六四年に無農薬へとかじを切りました。近所の田んぼに農薬が撒かれ、カエルや虫、ドジョウがいなくなっ ていく様子を見て、そこでつくられたお米をお酢の原料にすることに違和感を覚えたようです」



そう話す飯尾氏は地域活性化に向けて、「二〇二五年に丹後を日本のサンセバスチャンに」を高らかに掲げている。

スペイン東北部のリゾート地サンセバスチャンは、今こそミッシュランの星付きレストランが数多く集まる「美食の街」として世界的に知られる。しかし、その始まりは、若いシェフたちが始めたわずかな軒のレストランだったという。

飯尾氏が丹後において上げたのろしが、二〇一七年七月にオープンした築二二〇年の古民家をリノベーションしたシックなイタリアンレストラン「アチエート」だ（「アチエート」はイタリア語で「酢」という意味）。

上／古民家を利用したイタリアンレストラン「アチエート」。料理の多くには、飯尾醸造の酢が隠し味として使われている。左／飯尾醸造の蔵内には多彩なラインナップがそろったシヨップが設けられ、観光客が立ち寄る。



食材の魚介類やジビエの多くは丹後の漁師・猟師から直接入手。米は自家栽培で、野菜は地元の有機農家から仕入れる。食材を厳選した「アチエート」は、「あの富士酢の飯尾醸造が経営する」と開店早々から食通の話題を呼び、地元はもちろん全国から、おいしさに魅了されたリピーターが足を運んでいる。

「実は、この建物は別の方が所有されていて、四つ予定されていたテナントの一つとして私は鮎店



上／伊根湾は写真中央の青島が風を防ぐ形となり、通年、波はおだやか。左／伊根湾に向かって建ち、一階が船の収納場所になっている舟屋は、この地区特有の建築。

を出す予定でした。ところが、二年待っても他のテナントが集まらない。その間に美食で町を良くしたいという思いが高まり、ならば自分がやろうと建物を買ってしまいました」

当初はイタリアンと鮭店を同時に開店させる計画だったが、鮭職人の都合がつかず、まずはイタリアンのみからとなったそうだ。鮭店は、二〇一八年に同じ敷地内で開業を予定している。

「経営のことだけ考えたら、経

営が安定しているお酢屋だけでなく、飲食店を手がけるべきではないのでしょうか。しかし、飲食店を営むことにより、町に貢献できる可能性は、雇用や観光客を集める点で広がる。私はここに骨をうずめるつもりでいますし、子供もいる。たとえ自分の会社が安定していても、町に元気がなかったら楽しい余生は過ごせないと思うんです」

飯尾醸造ではこれまでも、無農薬米の田植えや収穫体験、蔵見学で年間約三〇〇〇人を集客してきた。

うまし酒もまた地域の活力を担う

食とともに丹後の魅力を語る上で欠かせないのは、日本酒。現在、丹後にある一〇軒の酒蔵の中で注目を集めている蔵の一つが、人口約二〇〇〇人の伊根町にある向井酒造だ。一七五四年創業。一階が海に続く舟の収納場所で二階が住居という、江戸時代中期から受け

継がれてきた舟屋が並ぶ、伊根湾沿いの一角に蔵が建っている。

杜氏の向井久仁子氏は東京農業大学の恩師の指導の下、古代米を使った淡い紅色の「伊根満開」を一九九九年に打ち出した。厚みがありながらもキレのようまさがありながらも徐々に広がり、やがて全都道府県から注文が舞いこむ状況に。現在では、世界最高とされるデンマークのレストランでも供されるなど、海外でも高い評価を得ている。

向井氏はまた、丹後地域振興計画など、地域振興にも携わってきた。重要伝統的建造物群保存地区に指定された舟屋の人気や「海の



躍進のきっかけとなった「伊根満開」(左)と、昔から地元で親しまれてきた「京の春」を手にする、向井酒造杜氏の向井久仁子氏。「伊根のPRのため、新しく造った銘柄にはすべて『伊根』の文字を入れています」と話す。

京都」のPR効果もあり、伊根を訪れる観光客が増加している。伊根が好きで進学の時ですら伊根から出たくなかったと語る向井氏が守りたいと願うのは今ある日常だ。

「伊根には生活感が残っていて、そこが好きなんです。このきれいな景色を守るためにはある程度の規制はあっていいのですが、整えすぎるのは何か違うなど。つくられた感じの観光地にはしたくないと思っています」

地元中学校でも、卒業生として伊根の魅力を語るといいます。

「山で木の実をとったり、海に潜ってサザエをとったりすることは都会ではできない。都会に出て

木下酒造代表取締役社長の木下善人氏(左)と、杜氏のフィリップ・ハーバー氏。ハーバー氏はオックスフォード大学卒業後、JETプログラム[※]の英語教師として来日し、日本酒に魅せられた。イギリス・コーンウォール地方にある人口約70人の村出身。「ここは田舎ですが、私にとっては衝撃ではなかった」と冗談めかして久美浜を語った。



美酒を介して 世界に広がる丹後の魅力

から友達づくりとかで絶対役に立つし、自分の個性につながるから、目いっぱい遊んで、伊根を熟知した方がいいと話しているんです」
自分が学生だった時代には都会に憧れて出ていった人が多かったが、最近では伊根の良さに気づいて戻ってくる若い人たちが出てきたと、向井氏は笑顔を見せた。

その向井酒造から丹後半島を西へぐるりとめぐり、西の付け根の

京丹後市久美浜町に位置するのは

一八四二年創業の木下酒造。創業時から地元で愛されてきた「玉川」をつくるのは、日本で唯一の英国人杜氏フィリップ・ハーバー氏だ。

二〇〇七年、ハーバー氏を招聘した代表取締役社長の木下善人氏は、上撰、佳撰以外は、ハーバー氏が思う酒を、思うようにつくることを申し入れたそう。そこで

ハーバー氏が提案したのは、蔵の特色の出る昔ながらの家つき酵母からつくる山廃^{やまはい}。その味わいは、骨太で濃醇だ。さらに当時は主流だった炭素^{たんそ}を施さないのので、黄色みを帯びている。

「大吟醸のようなきれいなお酒が主流の時代ですから、この酒が売れるのか? と正直なところ思いました」

その頃の木下酒造では、需要の九割方が地元。長年にわたり透明な日本酒に親しんできた人たちのなかには、色が濃いのは古くなっているからとの誤解も生じ、一時期、売り上げは激減する。

その色も味のうちだと何年も説明しているうち、ひと呼吸おいてゆつくりと体に染み渡る味わい同



木下酒造ののれんには、一七五年前の創業以来受け継がれてきた代表銘柄の「玉川」の文字が記されている。その由来は「近隣を流れる川上谷川の水が、神聖な玉のようにきれいだったことにちなんでいます」と木下氏は話す。

様、おいしいとの評判がじわじわ広がり、「玉川」は地元にあたためて根付く。さらには全国的にも人氣が高まり、なかでも夏酒の先駆けとなった「Ice Breaker」は、仕込み前にすでに翌年の酒販店向けの予約分が完売。「玉川」を求め、遠路はるばる久美浜の蔵を訪ねてくる人も増えたという。

うまし酒造りに邁進^{まいしん}する木下氏とハーバー氏は、他の蔵より早い時期から熟成酒にも挑んできた。

「熟成酒は、変化していくプロセスがおもしろいんですが、そうしたらうちくはさておき、とにかく

くおいしい」

そう話すハーバー氏は、造りの最中、ほとんど蔵にこもりきりになるが、蔵の向かい側の兜山^{かぶと}から見る日本海の景色が好きだという。

「日本海と久美浜湾を隔てる砂州は、小さな天橋立を意味する、『小天橋』と呼ばれているんです」との話を木下氏が継ぐ。

「日本海があり、内海があり、すぐ後ろに山があり、海のものも山のものも、食べ物も本場においしい。生まれ育ったところというのもあると思いますが、久美浜ぐらいいいところはないと思います」

現在、「玉川」は海外でも人気



木下酒造の向かい側にある兜山の頂上から一望できる京丹後市久美浜湾と「小天橋」。天橋立と同様、砂州によって外海と隔てられている。(写真提供:京丹後市)



ウィラー・トレインズ代表取締役の寒竹聖一氏。運営を担う京丹後鉄道は、「丹後くるまつ号」「丹後あかまつ号」などの観光列車が耳目を集めるが、東海道新幹線ゼロ系に使われたシートを一部で再利用するなど、普通列車にも乗客が心地よく過ごせる工夫が随所に施されている。

があり、ハーバー氏はPRのために欧米を訪れるが、それによって丹後の存在を世界に伝えられるのがうれしいという。

「京都と聞くと皆さん、世界遺産のある古都を思うわけです。でも、京丹後や久美浜のことを今まで気にすることもなかった人に、酒と併せて地域の魅力を語れる。すごく楽しいですね」

ハーバー氏をはじめ、丹後各地でものづくりに勤しむ方々が皆、地元への深い愛情を抱いているのが感慨深く胸に刻まれた。

地元の人々と連携した 鉄道路線のありかた

この地域を縦貫して人々の足となっているのが、京丹後鉄道（丹鉄）だ。第三セクターが運営していた「北近畿タンゴ鉄道」から、二〇一五年に高速バスの事業を柱とするウィラー社が運行を担うことになり、心機一転のスタートをきった。

京丹後鉄道は、関西で南海、阪急に次いで三番目に長い路線を有している。

「二―四キロという長さがあり、まずから、地域の足としての役割が大きい。それを機能させるためには、まずは安全第一が基本。その上で、地域の活性化にどう貢献できるかだと思っています」と、ウィラー・トレインズ代表取締役の寒竹聖一氏は語る。

丹鉄では、水戸岡鋭治氏デザインの観光列車が高い人気を呼んでいる一方、寒竹氏が大切にしているのは、地域の人たちとのコミュニケーションだ。

例えば沿線の小学生には年四回、運転士やアテンダントが記事

上／京丹後鉄道宮豊線の天橋立駅。文字通り、天橋立観光の玄関口となる。下／丹後半島の先端、断崖絶壁のリアス式海岸が続くカマヤ海岸は、一帯でも随一の絶景。野生のニホンザルが生息する、豊かな自然が残る。



を書く「たんでつこども新聞」を配布し、鉄道への理解を深めることにつなげている。未就学児とその親を対象とする、鉄道玩具で遊べる「おもちゃ列車」も毎月運行。また、第三セクター時代は経験豊富なJRのOB採用が中心であったが、自分たちでつくる会社のように、地元の若い人たちを積極的に雇用している。

一方で、地元の高校生が車両を使ったイベントを試みたり、観光列車では旅館の女将による案内や果物の生産者の直販を行ったりと、周辺の人たちが京丹後鉄道を利用する動きも見られる。

「列車の価値にいろいろな方が気づき始めて、一緒にやりましょ



うという雰囲気ができつつあります。丹後の人たちは、奥ゆかしい。この自然と同じで飾り気がないんです。自分を売ろうという感じもないです。そんな気質をわかってもらおうというのも僕の使命だと思っています」

現職就任とともに移住し、丹後に魅せられたという寒竹氏は「HIDDEN KYOTO」という言葉の口にした。

『隠された京都』。私どもだけの合言葉なんです。食材、反物、歴史、神話といった和の源流が丹

京丹後市役所企画政策課主任の小西宏和氏が背にする立岩は、ユネスコ世界ジオパークに認定された「山陰海岸ジオパーク」を代表するスポットの一つ。立岩がある丹後町間人は、希少な松葉ガニ「間人ガニ」が水揚げされることでも知られる。



後にはある。海外からの旅行者を含めて、それをもっと知ってもらおうというアプローチを始めています」

将来的に目指すのは、地域のネットワークづくりとさまざまな地域情報のプラットフォーム化。線である鉄道の路線を広く面の移動へと変えるため、地域交通との連携会議も定期的に行っている。

**思いやりとともに
細かく延びる地域の足**

地域交通の要、路線バスに関しては、全線上限二〇〇円に料金を

丹後半島の西側、京丹後市網野町に位置し、全長約一・八キロメートルの白砂が続く「琴引浜」。歩くとキュッキュッと音がする鳴き砂が観光客に人気。国指定の天然記念物・名勝指定。



統一して利用者数が増えた京丹後市の取り組みがおもしろい。

「路線バスの利用者は年々増えており、開始当初から比べると二倍以上になりました。また、料金を統一したことで移動できる範囲が拡大し、高校生の進学の実績が広がったと感謝されています」

そう話すのは、京丹後市役所企画政策課の小西宏和氏だ。利用が増えたそのかげでは、広報誌での案内、冊子にした時刻表の市内全世界帯への配布など、周知のための

地道な努力が重ねられてきた。京丹後市は、人口約五万六〇〇〇人の三割以上が六五歳以上。利便性を高めるために、バス停以外にどこでも降りられるエリアも設けられた。

「高齢者の方の外出を促すことは、医療費の削減につながるだけではなく、生きがいを持つきっかけにもなりますから」

とはいえ、路線バスだけではすべてを網羅するのは難しい。とりわけ過疎が進む市北部の丹後町では、バス停まで歩くのもひと苦労という場所も多い。そんな問題を解消するために二〇一四年に誕生したのが、NPO法人に委託して運行する予約制の「デマンドバス」だ。

「丹後町は日本海に面して全体的に坂道が多く、路線バスは坂の上の幹線道路しか走っていないため、お年寄りやバスを利用するのが非常に困難だったんです。家の近くまで来てもらえないかとの要望も多くありました」と背景を語るのは、運行を請け負うNPO「気張る！ふるさと丹後町」の広報担当理事の東恒好氏だ。

さらに二〇一六年には、住民がドライバーを務める、マイカーに



NPO法人「気張る！ふるさと丹後町」理事長の村上正宏氏（右）は丹後町「寿雲山萬福寺」の住職、広報担当理事の東恒好氏は一級建築士と、本業を抱えつつ地域のために活動を続けている。「ささえ合い交通」の表示が貼られた車は、村上氏のマイカー。

よる配車サービス「ささえ合い交通」が始まる。デマンドバスとは異なり、年中無休で午前八時から午後八時までであれば、スマートフォンでいつでも好きな時間に呼べる。

「『ささえ合い交通』の利用はこの一年間で、毎月平均六〇回以上。一日当たり二回運行という状況で、予想以上です」とは東氏。

NPO法人の理事長を務める村上正宏氏は、「デマンドバス」「ささえ合い交通」ともに自らドライ



天橋立南端と天橋立駅側の陸地を結び、船舶の通行時に水平に90度旋回する廻旋橋。1923年の完成当時は手動式だったが、現在は電動式で観光客向けに定期的に旋回する。



バーとなって活動しているが、外に出て欲しい年配の方ほど、わざわざ来てもらうことに恐縮する傾向があると話す。

「僕が寺の坊主だからというところもあるのか、お迎えに行くところ、『申しわけない』となるんですよ。とくにおばあちゃんたちは遠慮深い。その意識を変えつつ、地道に利用を拡げていければと思っています」

文字通り「ささえ合い」の積み重ねが実り、高齢者が日常気楽に外出するための支援につながっている。また、観光客も自由に利用できることから、ジオパーク観光の移動にも大いに貢献。現在使

用している配車アプリは多言語対応しているので、海外の方もスムーズに活用できると、東氏も話す。

北前船の時代のよう に広がる日本海エリアの連携

未来に向け、観光の連携は丹後半島、そして「海の京都」のエリアからさらに広がるようとしているのにも心を惹かれた。京都丹後鉄道の母体であるウィラーは二〇一七年九月、新潟市、福井県敦賀市、京都府舞鶴市、兵庫県豊岡市と連動して新たな観光ルートを構築する「日本海縦断観光ルート・プロジェクト」を打ち出した。

冒頭にお話を伺った今井一雄氏によれば、高速道路が豊岡市まで延び、最終的には山陰道までつながる将来を見据え、二〇一六年からは鳥取から宮津までの商工会議所の会頭・会長会議が行われるようになったそうだ。

「まだ年に一度の情報交換を行うぐらいですが、画期的な動きだと思っています。かつての北前船のようなつながりが、新たにできればおもしろいですよね」

今井氏は、舞鶴からフェリーを利用して小樽に向かおうとしていた外国人女性との出会いを述懐しつつ語を加えた。

「今まで私には、そんな発想はなかったんです。でも、地球の大きさから見たら、海外から来た人にとっては、舞鶴から小樽までの移動は大した距離ではないのですね。われわれはもっと勉強しなければならぬと考えさせられました」

将来的に「海の京都」は、古代同様に日本海側のターミナルにもなり得る可能性を秘めている。多彩な交通手段が結ぶ広域での連携が実現できれば、北前船がにぎわいを運んだ時代のように各地で笑顔が広がり、それぞれが住むまちへの思いがいっそう深まってくるのではないだろうか。



日本三景のひとつ天橋立は、全長約三・六キロメートル。インバウンドの旅行者が頼りにする「ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン」では、その景観が二ツ星の評価を得ている。

（注）利用者からの呼び出しや料金徴収のシステムは、ICT（情報通信技術）を駆使した配車アプリを活用。乗車は京丹後市丹後町内、降車は京丹後市全域という制限つきで認められている。